

— 学術講演 —

ドイツにおける宗教と教会

その状況の叙述と宗教社会学的見解

ヨアヒム・マッテス

(エルランゲン—
ニュルンベルク大学)

茨 木 竹 二

(東京家政大学)訳

学部長挨拶並びに講師紹介

本日は、西ドイツの社会学者マッテス先生を迎えて今年度最初の社会学部主催の学術講演会を開催いたします。講演に先立って、講師並びに通訳の先生の簡単な御紹介を申し上げたいと思います。

ヨアヒム・マッテス教授は、現在、西ドイツの社会学会の会長をしておられる方で、ベルリンの自由大学で博士号を取られ、現在はエルランゲン—ニュルンベルグ大学の教授でございます。それ以前には、ミュンスター大学、ビーレフェルト大学など西ドイツの有名な大学の教授を歴任された西ドイツを代表する学者であります。

先生の御専攻は宗教社会学ですが、本日もそれに関するお話をしていただけるわけです。先生は宗教社会学の理論的研究だけにとどまらず、具体的な調査研究にも従事しておられ、現在、特にシンガポールを拠点にされて東南アジアの宗教的な状況について調査研究されておられます。そのためここ数年間、毎年数ヶ月に渡って、東南アジア、シンガポールにおみえになり、その実態調査を行っておられる方です。東南アジアの多民族社会の中で、都市化が進行していくプロセスにおいて、一体、宗教はどのような役割を果すのか、宗教というものはどういう風に展開するのかという極めて我々にとっても興味深い問題に取り組んでおられます。関西学院大学社会学部にとりましては、このような現代社会の「宗教の社会学的研究」についてお話いただけることは、

大へん時宜にかなったことだと思います。

それから、通訳の先生は、英木先生でございますが、先生は東京家政大学の専任講師を務めておられますが、御専攻は宗教社会学で、しかも、ドイツの大学で勉強され、かつ、むこうで専任助手を務めておられた経験がございますので通訳者といいたしましては、大へんふさわしい方だと思います。

それでは、マッテス先生の講演にはいらしていただきます。皆様、御静聴をお願いいたします。

ドイツにおける宗教と教会の状況を「外側から」正しく理解しようとするならば、さしあたり若干の重要な構造的及び歴史的諸事実を確かめねばならない。

ドイツは徹底して一つのキリスト教国であり、人口のほぼ 95 パーセントが、二大キリスト教会、すなわちカトリック及び福音教会に属している。教会のメンバーシップは著しく形式に則っているので、容易に確定される。つまり教会のメンバーシップは、両親の教会所属に応じて誕生とともに取得され、そして法廷における正式な宣言によってのみ放棄される。この法廷での手続きは複雑でかつ出費が嵩むため、それを行うにはかなりの決意が必要とされている。更に教会所属は公文書に記帳され、所得税の約 9 パーセントにあたる教会税が国家によって徴収され、そして諸教会に配分されることとなる。二大キ

リスト教会の他に一連のいわゆる「自由教会」Freikirchenと諸教派がある。それらはいわゆるプロテスタントに類するものであるが、公的な宗教生活においては何ら大きな役割を演じてはいない。更に西ドイツへの外国人労働者の移住に伴って、キリスト教以外のより小規模な諸教団が形成されているが、しかしドイツ人はそれらに殆んど所属していない。特に（トルコ人とチェルノシヤ人等の）ギリシヤ正教及びイスラム教の諸教団が、それに該当する。最後に記すべきことは、青少年の間でキリスト教以外の諸集団、（たとえば仏教やヒンズー教の）に加入するというある種の傾向があることである。しかしそれが行われようとも、正式な教会所属には何ら直接的な影響はない。何故ならば既に記したように教会所属がかなり厳格に規定され、登録されているからである。

歴史的には、二大キリスト教会がドイツでは領土によって組織されていることが重要である。カトリック教会は、形式上ヴァチカンの管轄下にあるところの司教区で割り振られているが、ドイツのカトリック司教会議が国内の最高決定機関となっている。決定的なことは、宗教改革以来福音教会が、いわゆる領邦教会として組織されていることであり、その領土の境界は、19世紀末における帝国設立以前のドイツ諸領のかつての境界と一致している。改革後特にルッター派教会では、厳密に歴代の諸侯が同時に領邦教会の「監督」Bischofであったし、1871年の帝国設立以後ドイツ皇帝は、同時にドイツにおける福音教会の「大監督」oberster Bischofであった。福音教会が第一次世界大戦後その「国家教会」Staatskircheとしての地位を破棄されたとは言え、その領土に基づいた組織は、今日まで維持されて来ている。現在領邦教会の首位には「領邦監督」Landesbischofが位置し、そして言うまでもなく単に委託された権限を有するにすぎない福音教会の中央評議会がある。つまり「主権」Machtは、今日諸領邦教会にあることになる。

第二次世界大戦まで、キリスト教会の領土に基づ

いた組織は、ドイツ帝国の諸区域がそれぞれ宗教上及び宗派別にみて、比較的、同質の人口を持つことを意味していた。すなわちたいていの領邦区域は閉鎖的であった。そしてその区域は福音派かカトリックのいずれかが支配的であり、その際他の宗派ははっきりとした少数派に位置したのである。この同質性は第二次世界大戦とその後の避難移動の結果、並びに水平移動の一般的な増加の過程において打破されている。なるほど今日でも依然としてカトリックの支配的な地域（バイエルン、ライン地方）及び福音派の支配的な地域（北ドイツ）があるにせよ、人口構成はそこでも徐々に共和国全区域の平均的な構成に接近している。つまり福音派とカトリックの人口は、ほぼ半々という状態である。

第一次世界大戦後共和制の採用と君主制の廃止によって、国家教会の原則は消滅した。しかし二大キリスト教会は、たとえば完全な「自主加入教会」Freiwilligkeitskircheの位置に移し変えられたのではなく、すなわち国家教会制度の重要な諸要素はそのまま維持されたのである。それにはとりわけ教会税の原則が該当するが、それは既に前述したように国家によって所得税から差し引かれ、教会に回されるものである。このことは、教会メンバーにとって一つの強制献金のようなものを意味することとなり、その結果それは一方で、双方の教会にかなり確定的な財政的基礎を保証している。そこで双方の教会は、そのメンバーを維持しかつ補充獲得のための「徴募措置」Werbemaßnahmenを必要としなくなる。しかしながら他方では、メンバーの意識において教会に、国家の官僚制と同様に近づき難い「公的制度物」Öffentliche Institutionの性格をも与えているのである。教会税と並んで以下の事柄が考慮されねばならない。すなわち過去において有効であったように国家が教会財産の没収に関わる諸規定に基づいて、かつて教会が所有していた土地の「賠償」Entschädigungとしてかなりの額を教会に依然として支払っていることである。それどころか教会のたいていの公的活動（社会事業、病

院等)を、国家が財政的に援助すべきことが法的に定められているのである。最後に指摘すべきことは、双方のキリスト教会は、たしかに西ドイツにおける諸政党の一つに結びつくことはないにせよ、政治生活においてはまた特定の役割を演じていることである。つまり双方の教会は、通例としてたとえばラジオ・テレビ放送顧問団、公共福祉及び児童福祉委員会等の各々の公的な審議機関に代表を出している。更に牧師ないし神父に対しては、教会税の歳入から国家によってではなく、教会によって報酬が支払われていること、そしてなるほどキリスト教の私立学校はあるものの、司祭を養成する若干のもの以外には、宗派の総合大学と単科大学は存在していないこと、等は留意すべきことと思われる。しかし一般に神学者の養成は、国立の総合大学及びその神学部で行われているのである。以前の国家教会の位置とは対照的に変容した状況は、しかしそれもまた結果的に純然たる自主加入教会にはならなかったのであるが、「国民教会」Volkskircheという表現で特徴づけられている。

西ドイツの状況とは対照的に、東ドイツの状況は、純粹に形式上からみて、若干重要な点が異っている。すなわち一つには、プロテスタント人口がここでははるかにカトリック人口を凌いでいること、二つには教会税の原則と、社会事業及び教育における教会の諸活動を国家が援助する原則が廃止されたことである。また教会を正式に脱退することも緩和された。したがって東ドイツにおける教会は、非常に不安定な公的状況にあり、なおかつそれは以下によって部分的に遮蔽されている。つまり、結果的に西ドイツから東ドイツの教会へ甚大な援助が注がれている事実を東ドイツの国家官庁と政党審議機関は黙忍していることである。今日でも東ドイツ人口の約50%が、何らかの形で依然としてキリスト教会を信奉していることが見込まれるが、もちろんそれは不確かな見積りである。何故ならばたとえば察知されるように教会生活に関与することは、職業生活及び高等教育への関門において不利益を被るからである。それ故多くの

人々が依然として教会への帰属意識を持っていると思われるが、しかしこれは職業生活での不利益を恐れるため、外側には現われて来ないのである。西ドイツにおける双方のキリスト教会は、これらの諸事実から何はさておき少くとも重大な公的地位を獲得することとなり、それは目下どの側からも大きくは左右されることがない。自由主義政党(自由民主党FDP)の若干の試み、すなわちたとえば法的に教会税を廃止してメンバーの自発的な献金に置き換えることは、既に議会で失敗している。つまり二大政党(キリスト教民主同盟CDU, 社会民主党SPD)が、この主唱に賛同しなかったのであり、この関連において我々は、キリスト教民主同盟が主にカトリックによって、社会民主党が主にプロテスタントによって占められていることを知るべきであろう。

社会学的な視点においてこの状況から構造に関する若干の見解を引き出すとすれば、次のように述べられよう。

西ドイツにおける双方のキリスト教会は、社会的にも経済的にも一つの権力要素となっている大規模な諸社会組織に連なっている。なるほど二大教会は時事的な政治問題に著しくは関与しないが、しかし共和国における公共生活に大組織として多くの次元で甚大な影響を及ぼしている。社会的大組織としての双方のキリスト教会には高度な「職業的専門化」Professionalisierungがはっきりと認められ、教会で協同する人達の範囲、当然の如くとりわけ、牧師及び神父は、厳格に定められた独自の養成を通じて新規補充されるが、それはその際厳密な選択基準によって規定される。「牧師」Pfarrerと「神父」Priesterは、フルタイムの職業であり、その活動は教会の職階制度によって統制されている。その種のすべての専門的職業がそうであるように、牧師や神父の職業集団(及びまたソーシャルワーカーや児童保護士等のような、教会における他の多くの職業集団)は、職業活動の目安となる独自の基準と新規補充の独自の基準に服している。そしてその職業集団は独自の

職業用語を造り出して、それは宗教上の日常用語とは著しく区別されるし、また科学的神学の標準に則っている。牧師と神父の独立した職業的地位、及び言うまでもなく彼等の専門的な言語や思考の次元は、その特異性の故に教会メンバーの宗教上の日常的思考とは著しく疎遠なものとなっている。キリスト教徒は日常生活において宗教的諸観念及び理念に志向するが、それらはなるほど自らが宗教的社会化の過程においていつしか受入れてきたものであるものの、キリスト教の教義学の精緻さはかなり掛け離れたものであり、それはあたかも養成期間中に牧師と神父の候補者によって習得されることと同じ様なものである。したがってたとえば神の本性についてのキリスト教義学上の観念、三位一体(父なる神、イエス・キリスト、聖霊)の神学上の原則等は、フルタイムで勤める牧師と神父にとっては、思索によって練り上げられた神学上の真理であるが、しかしこれらの諸観念をもって始めることの可能な「キリスト教平信徒」Alltagschristはわずかであり、彼等の独自の生活経験との関連において、神の本性及びその子イエス・キリストの役割の理念が生ずることとなる。カトリック教会では一方における神父の専門的な神学上の思考と、他方における「素朴な」einfach教会メンバーの宗教上の日常的思考との間の差異が、部分的には豊富な典礼を通じて橋渡しされているし、その典礼は各々のキリスト教平信徒に、たとえば日曜日毎の礼拝における行事と感情的に同一化する可能性を与えている。プロテスタント教会では典礼がより乏しく、そして聖句による説教が大半を占めているが、ここでも牧師と教会メンバーとの間の思考・言語上の差異が、更に著しく現れて来ている。

端的に述べるならば、つまり教会メンバーと双方の教会の専門職としての司祭の間には、一つの大きな隔りがある。この隔りとは、既に述べたように一方では差異を来たしている思考・言語次元の問題であるが、しかしまた一つの構造的な側面を持っているのである。双方のキリスト教会の教義にした

がって一般に幼児洗礼が行われているが、すなわちそれは、両親が自らの子供を生後直接受洗させ、それによって教区Kirchengemeinschaftに受入れられるようにすべく義務づけられてることを意味している。10歳から14歳までの子供には双方の教会において宗教教育が施されているが、それは彼等に教会への帰属意識を自覚させることを意図している。この教育は教会のある儀式を通じて締め括られる(福音教会では初聖餐式Konfirmationが、それを裏書きしている)。この幼児洗礼の原則を社会学の専門用語で表現するならば、教会のメンバーシップを得る際、個々人の決定に因らないばかりか他人によって(ここでは両親と牧師や神父が共同して)書き加えられるところの、名目上のメンバーシップが問題であると言えるし、それはまたちょうど国家帰属や国籍が、個々人の決定によって得られるわけではないことに近似している。

そこで我々は、組織社会学の他の分野において該当する諸研究から、名目上のメンバーシップが二つの基本的な構造上の問題によって規定されていることを知ることになる。名目上のメンバーシップに基づいた組織は、常時催物を配慮しなければならないのであり、それはメンバーにうわべだけのメンバーシップ以上に帰属意識をも媒介するため、言わば彼等に動機Motivationを与えるためである。自らの決定によらず、むしろ名義を書き込まれることによってメンバーシップを得たメンバーの間では、そのような催物にもかかわらず一定の動機不足が常にみられるのであり、組織社会学の用語で言うならば、そのような組織においてはメンバーの中に「無気力」Apathie現象が、容易にみられるのである。宗教社会学の観点においては西ドイツの国民教会の状況におけるジレンマと動揺が、丁度今挙げたばかりの諸徴候にはっきりと現れている。すなわち双方の教会は、一方で社会組織として高い地位を与えられているが、他方で内的な問題点、つまりメンバーと専門家としての司祭との間の隔り、並びにメンバーの間にみられる一定の無気力に頭を悩めているのである。

この無気力は周知のところであり、多くの資料で証明することが可能である。したがってたとえば日曜礼拝への非常にわずかな参加（地域差を含めて平均約4～5%）は、はるかに多数の新生児が依然として受洗していることに比例していないことになる。つまり両親が、自らは殆んど教会生活に関与しないにもかかわらず子供に受洗させるならば、そこには広く行われている名目上のメンバーシップと参加の心構えとの間に矛盾が現われてくることになる。

ところで名目上のメンバーシップの原則に基づいた国民教会のこの内的矛盾には、自主加入教会を一瞥する場合、なるほど軽卒に消極的な判断を下すわけにはゆかないであろう。つまり自主加入教会もまた内的矛盾、それも単に他のものを抱えているにすぎないのである。と言うのは自主加入教会は、メンバーを募ることを頼りとしているし、常に献金を求めることに関係づけられているのである。したがってこれら二つの事柄は、一私達がアメリカにおける自主加入教会についての多くの研究から知っているように一宗教的真正さを著しく墮落させることがありうる。

ドイツのキリスト教徒の教会生活への関与がわずかであるのは、いわゆる世俗化の歴史的過程にもっぱら帰することができる、と長い間一般にまた宗教社会学者の間においても確信されてきた。すなわち近代世界は、進展しつつある意識と社会の合理化を基礎とし、この合理化によって近代社会における宗教一般が社会的現実の周辺に追いやられる、と考えられたのである。更に宗教的諸理念及び観念は、近代的合理性に対してはすぐさま持ちこたえられなくなると考えられたが、しかし言うまでもなくマックス・ヴェーバーによって根拠づけられたこの論題は問題である。この論題が問題となるのは、就中それが産業化及び都市化のような社会的諸経過と結びつけられる場合、及びそれによってその諸経過にある特定の社会的な必然性 *Zwangsläufigkeit* が仮定される場合である。たとえば社会史のごく最近の諸研究が、一それらは出典事情が不確かなため扱いにくい

のであるがキリスト教会のメンバーによる宗教上の催物への関与が既に数100年も前から明らかに今日より多い状況にはなかったことを示している。神父と牧師が教会メンバーの不足しがちな礼拝への参加を嘆いている資料は、既に宗教改革の時代からみられるし、19世紀を出所とする数字は、既に産業化以前にも礼拝への参加が、殆んど今日以上に高いパーセンテージを示してはいないことを証明している。しかしながらこれには更に何か別のもの、つまりはるかに重要なものが加わってくる。すなわち合理化、産業化、都市化及びすべてそれに結びついた社会的諸帰結として記述されるものは、なんと言っても教会外で生じかつ教会に対して全く影響しないというものではない。つまり教会自体がその過程に巻き込まれ、その過程に見舞われ、そしてその過程とともに変化するのである。したがって組織としての教会自体、また合理化の過程がそれに及ぶことによって、著しい変化をみることとなり、徐々に合理的に組織化された教会になってゆき、更に神学の教理とともに科学の合理性に服することになる。要するに我々は、近代社会の発展が脱教会化 *Entkirchlichung* 或いは脱キリスト教化 *Entchristlichung* に帰着する、等と容易に断言することはできないのであり、むしろ社会変動に伴って教会とそのメンバーとの関係が構造的に変化する、と言うべきであろうし、これがそのままキリスト教の特性或いは教会制度の喪失を意味することはないであろう。

そこで私はこの問題性をより厳密な意味で宗教社会学的に捉えてみようと思うのであるが、私見によれば社会学的に探究されてきたすべての宗教に関して、顕在的 *explizit* 宗教と潜在的 *implizit* との間の恒常的な緊張関係が論及されうと思われる。その場合顕在的宗教については、組織形態と行動様式が宗教的なものとして外見にはっきりと表れているすべてのもの、つまりあらゆる種類の儀礼、礼拝に関する催物、ある宗教への帰属の外的な標徴、司祭の職業的特徴等々が理解されるべきである。潜在的宗教については、すべてそのような宗教的諸理念、

観念、しかしまた諸々の儀礼も理解されうるが、それらは、それ自体の宗教的な性格が一厳密に言えば顕在的宗教によって設けられた標準にしたがって一はっきりと識別されることなく、日常生活との密接な結びつきを成立させ、そして日常生活と融合している内容のものである。私は以下に、この区別がより詳細に意味するものを、西ドイツの例で再度説明してみようと思う。

西欧における宗教社会学の貧困の本質は、長い間、全く一般的に以下の事柄にあった。つまり研究において確立された顕在的宗教の標準にしたがって宗教的なものとして探究しえたものだけが、「宗教的」religiösと呼ばれかつ見做されたことである。したがってたとえば教会がそのメンバーに宗教的な行動として期待したものが、久しく「キリスト教の宗教意識」Christliche Religiositätとして規定されてきたのである。一般のカトリックは少なくとも日曜日にミサに参加すべきである、と言うことがカトリック教会における戒律であるとして見做された時、ミサに行く頻度が宗教意識の規定に対する基準として解されたし、或いはまた福音教会がメンバーに、イエスキリストの父なる神との関係についての明瞭な観念を神学の教義の意味において有することを期待した時、そこではたとえば「あなたは、イエスキリストが父なる神の体現した子であると信じますか」のような意見質問において、キリスト教徒としての意識を測ることが試みられたのである。そのような諸基準で測る場合、それは当然住民のキリスト教徒としての意識を全く軽卒に肯定することとなった。言うのは規則的にミサに行くことも、またキリストの位置を神学上正確に規定することも一アンケートに応じたキリスト教の平信徒の生活世界及び生活観点においては一彼等のどのような理解がキリスト教にとって重要であるか、と言うことにはならないからである。すなわち高度なそして洗練された教会の行動期待及び神学上の標準で測るならば、実際には人々のキリスト教徒としての意識は低い。しかしこのような確定の背後には、いわゆる測定上の誤りがあ

る。つまり高度に組織化され、専門化された教会の期待と理念は、科学的研究の分析標準にはなりえないのである。

宗教社会学において宗教性探究の基準を開陳しようとするならば、顕在的宗教（教会）によって代表される標準の他に、むしろ潜在的宗教（日常意識）の標準も考慮に入れられねばならない。もしこれが行われない場合には、単に教会組織の目的実現のための援助が行われるだけであり、つまり人々がどの程度この組織の行動・思考期待に応じているか、が不問に付されるのみである。そこではまた同時にこの標準が明らかに「正確」rigtigであること、が科学的研究を通じて間接的に裏書きされる。多くの宗教社会学者（ここでは教会社会学者と言った方がより適格である）は、この測定ミスによって以下のように理論的にも誤謬をおかしたのである。彼等は、人々が教会の期待に十分には応えなかったことを探知したことによって、世俗化論題に対する幅広い証拠資料を見出し、と確信したのである。つまり、幼児洗礼と教会税が教会のメンバーになることの強制を意味しているので、人々は教会を離反し、一たとえばドイツの諸事情においては一その理由のみで教会に所属しているにすぎない、と確信したのである。そこでは新に教会の公的な代表者達がすすんでその誤謬に賛同し、教会メンバーを失うかもしれないと言う理由から彼等はなおさらより厳格に幼児洗礼と教会税に固執したのであった。これは、如何にして（ここでは誤謬をともなっている）社会学的研究が社会的（ここでは教会における）行為の実践に反作用を及ぼしうるか、と言うことの一つの好例である。私がここで顕在的宗教及び潜在的宗教の間の恒久的緊張関係を挙げたことは、この教会社会学とその理論的基礎構築において完全に見過ごされかつ無視されたのである。歴史的には顕在的宗教と潜在的宗教がほぼ重なっている（たとえば部族宗教におけるような）状況があるが、他に現在の西ドイツにおけるような、両方がかなり遠く掛け離れている状況がある。正にそのような事例においてこそ顕在的宗教（教会制度）にあまりにも執

勘につきまとう判別基準を、潜在的宗教の判別基準を補足的に問うことによって相対化することが、宗教社会学的研究にとっては問題となる。

さてこの潜在的宗教の判別基準を探知することは全くむずかしい。すなわちそれは、その本性にしたがって潜在的であるだけに、顕在的宗教に比べてはるかに明瞭ではないし、容易に測定可能ではない。とは言え測定可能性の方法論上の問題については我々は、ごく容易に測定可能であるか、或いは測定可能とされうるものだけを我々の研究に含み入れることを、不用意に受入れてはならない。では如何にして潜在的宗教の判別基準は探知されようか。西ドイツでは 70 年代に福音派国民教会の調査が行われたが、それはとりわけこの問題に供するものであった。ここで私は詳細に立入ることが出来ないの、むしろ単に要約して以下に論及したいと考える。

西ドイツの現在のように顕在的宗教が非常に発展し、そして社会的に可視的である場合我々は、それが言わゆるすべての潜在的宗教を「駆逐」erschlagenし、抑圧していることを前提とせねばならない。しかし人々は日常生活の中でそれぞれに特徴づけられた宗教的諸理念を、依然として発展させていると思われる。つまり制度的に確立された教会とその規範が支配する中で、人々は自らの宗教的諸観念を依然として「宗教的」religiösなものとして信奉することにうしろめたさを感じるのであり、そしてルックマンによって「私事化された宗教」Privatisierte Religionと称されたものが発展するのである。そのような私事化された宗教は、教会によって代表されるようにその内容において益々顕在的宗教の公的諸規範から掛け離れてゆき、更に任意となり、それ故またキリスト教以外の宗教（青少年セクト）をも受け入れるようになる。「私事化された宗教」Privatisierte Religionは、言わば潜在的宗教の極端な事例であり、それは顕在的宗教とは殆んど交換関係に立つことがないと言っても過言ではない。今日の西ドイツはそのような宗教的状况にあると思われるし、また顕在的宗教がそ

の上国家的及び政治的抑圧に対して身を隠し、かたばわねばならない東ドイツは、更に極端にそのような宗教的状况にあると思われる。（たとえば東ドイツでは、党の役員達が自宅から遠く離れた場所でキリスト教を信奉したり、或いは子供にキリスト教の洗礼を受けさせている例がある。）

潜在的宗教は、最近の諸研究によれば明瞭に以下の諸問題に向けられている。

- 個々人にとってのがれられないような生活危機の克服の諸問題（婚姻危機、病氣、事故、死等）
- 生活段階移行の際の諸問題（思春期、結婚、親ばなれ、職業活動期、老化等）すなわち生理及び生活サイクルに関する教導
- 日常生活の道徳上の諸問題（子供の教育、結婚・職業生活並びに政治における道徳的決定等）

顕在的宗教の代表としての教会は、独自の典礼及び専門的な神学の世界に固定しているため、潜在的宗教のこの日常諸次元への通路を久しく見失っている。同時に人々は、彼等をわずらわせ、圧迫している日常的諸問題において、顕在的宗教の側からは殆んど何らの助力や支援を見出ししていない。つまり潜在的宗教は放任されたままなのである。教会の実践にとっては、それが制度物としての教会及びそのメンバー間の接触を強化せねばならない、と言う結論を引き出すことができる。しかしその場合牧師ないし神父は、これまでのように制度物としての教会の“本職の hauptberuflich”代表者のメガネを通して評価することなく偏見なしに人々の日常的諸問題を認識しうる状況に置かれなければならない。

宗教社会学的な研究にとっては、それがその目標及び方法において、何が人々の日常生活の中で宗教として理解されているか、により強く重点を置かねばならないことを結論として引き出すことができるのである。またそれは人々の日常生活の中で宗教として理解されるものが、キリスト教とは何かについての教会の公的な諸観念と符合しない場合にもあてはまる。したがってたとえば「迷信」Aberglaubenのすべての形態は、人々が顕在的宗教の支援によら

ないで生活諸問題を宗教的に解決しようとするこ
の指針である。この視点において宗教社会学には、
広範な研究分野が待受けることになるのであり、こ
の分野は質的な研究方法によってのみ開拓されうる。
と言うのは現在行われている社会研究の調査方法は

ここで役に立たないのである。何故ならばそれが、
顕在的宗教の公的な判別基準にあまりにも著しく結
びついているからである。

(以上)